

第二回広島平和学習の旅

ミネソタ州立大学モアヘッド校
外国語・外国文化学部 学部長
三田高敬（教育学博士）

2008年3月1日から3月8日の旅行を終え、2006年第1回の旅行を比較しながら、今回の平和学習の旅を振り返る。

報告が遅くなった理由

第1回の旅行の結果を2006年9月29日の米国中西部アジアの学会で発表したが、今回は2008年10月11日の学会で発表できる段階までに旅行の報告がまとまらなかった。その理由は、学生の現地での学習態度、彼らのレポート内容、アンケート結果等に不可解な部分があり、総合的な分析に時間を要したからだ。

アンケート調査

今回は旅行前後にアンケート調査をして、学生の心境変化を数値で捉えようとした。

参加者

前回は20名で、半数はオーナーズプログラムにいる（学業成績の良い学生）参加者が含まれていた。今回は11名のオーナーズプログラムにいない学生と3名の一般参加者（大学教授、研究者）、合計14名であった。

引率教師

前回同様、物理学を教えるアナン・シャストリ教授と日本語・日本文化を教える私の2名であった。

平和学習旅行の目的

前回は6回の事前学習で原爆の破壊威力、原爆後遺症、原爆の悲惨さを学び、現地で原爆体験者からの話し、現地視察、平和学の研究者達からの講義を通して「平和の尊さ」を学ぶことを旅行の目的とした。今回は7回の事前学習の資料に450ページ余りあるGwynne Dyerの「戦争」を付け加え、「人間に戦争を引き起こす習性、非戦闘員を襲撃すべきでないという道徳観念等があるのか」と言う哲学的観点から現地学習体験を通し、「平和の尊さ」を学ぼうとした。

学習課題

前回同様に単位（3単位）を得たい参加者には、学習記録（出発前の講義から旅行終了までの学習記録）とレポート提出を課した。11名の参加者のうち、単位修得を希望したのは9人であった。

アンケート結果

アンケートは（別紙参照）旅行講義の初日の1月9日と旅行から帰ってきて11日後の3月19日実施した。10項目の質問で学生の意識の変化を調べたかったのは、

- 質問1 原爆投下が必要であったか否か。必要ならその数、
- 質問3 将来原爆を使う可能性、
- 質問5 原爆の保持が戦争を起こさせない役割を持っているか、
- 質問6 核を持っている国が核を持たない国に核を持つことを禁じる正当性、
- 質問10 戦略のために一般市民を標的にする戦争への見解

であった。

質問1には、旅行前に8名が「原爆投下の必要性はない」と答え、その数は旅行後にも変わらなかった。

質問3の「将来の核戦争の可能性」には、旅行前に9名が「その可能性がある」と答え、旅行後は1名が「わからない」と答えて、8名になった。

質問5の「核爆弾の保有が戦争の抑止力になるか」については、旅行前後の調査で同数の6名が「核保有国に対しては、初期段階では抑止力はあるが、事態が深刻になれば早く使いたくなるので、抑止効果はない」と答えた。出発前に1名が「非核保有国に対しては抑止効果がある」と答え、4名が「どんな条件でも抑止効果がある」と答えた。帰国後は1名増えて5名が「どんな条件でも抑止効果がある」と答えた。

質問6の「核保有国が核を開発・保有していない国に核の開発、保有を禁止する正当性」については、「いかなる条件でも正当性がない」と答えたのが10人、帰国後は1人が「正当性はないが、軍事バランス上の必要性」に加わり、「いかなる条件でも正統性がない」が9人になった。

質問10の「勝利のために一般市民を標的にする戦争」については、「いかなる条件でも恥ずべき行為である」と答えたのが出発前は6名、帰国後は5名になり、1名が無回答にまわった。「戦争に勝つためには手段を選べない」と答えたのが旅行前後に同数の3名であった。「分からない」と答えたのが旅行前後2名であった。

アンケート結果で不可解な回答

旅行前に「原爆投下が必要ない」と答えた2名の学生が帰国後は「1つは必要」、「数に制限なく必要な限り投下しても良い」に変えたこと。そして、「数に制限なく必要な限り投下しても良い」に変えた学生が質問10では「一般市民を標的にする戦争を恥ずべき行為」だと答え、答え方に一貫性がなかった。

核についての予備知識と核を使用した自国の歴史

原爆についての情報（日本人から見るとたいした内容ではないが）が多くのアメリカ人に入ってきて、将来の核戦争の可能性を危惧し、核保有の抑止力効果に疑問を持ち、核保有国が非核保有国に核開発・保有を禁じる矛盾に気がついてきた。核爆弾の保有、使用は60年以上たった今でも、核を使用した自国の歴史を客観的に見ることはまだ難しく、たとえ将来の使用の是非を考えても、過去の使用を正当化する潜在意識が働き、使用禁止の心情になることを妨げているようだ。

学生の提出物から分かったこと

平和を維持するには、他国の文化、歴史を理解することである。人間は生まれもって破壊的ではない。人間は相手を知れば、友好的に問題を対処しようとする力、理性が備わっている。このことについて3人の学生の意見を下記に紹介する。

学生 A

帰国して思うことは、広島の被爆地と自分との関係がより密接になった気がする。原爆投下地点から宿舎まで歩いて帰ると何か特別な思いが心に残った。私が歩いているあたりで被爆して苦しんでいた人たちがいたのかと思うと本当に心が痛んだ。被爆体験者の生の声を聞いて、自分の人生観が変わり、この体験は生涯忘れられないことになると思う。私も広島に訪れその悲惨さを学び、じかに被爆者の声を聞けば心が動かされたのだから、戦争を起こすのは消して人間の本性ではないと思う。次の世代の人たちはこのような戦争が過去のものと思うことを願う。

学生 B

他の国の言語、文化を知ろうとする努力が平和を維持するための肝心な要素だ。人間にはこの他の言語・文化を学ぶ能力があるだから、責任を持って平和を目指す努力をするはずだ。

学生 C

核爆弾をいくつ持っていても、平和を維持することはできない。核を持てば持つほど敵対する国どうしのにらみ合いが続き、平和をもたらさない。他の文化を知ることのほうが平和を作り出す。そして他の文化を理解するには、その言語を知らなければいけない。この旅行は私が日本人に抱いていた考え方を変えた。今の私は日本人、日本文化を尊敬している。

まとめ

1. 参加者の事前の知識、意欲、学力などをもっと考慮すべきであった。
2. 今回の「哲学的な観点から平和の意義を考える」という課題は難しかったのかもしれない。広島・長崎で終わっていない核の開発・実験の被害を考えなければならないので、学習資料の総点検が必要だ。例えば、第5福竜丸の被爆事件を機に原水爆実験反対運動が世界の市民運動になったこと、その後の本家日本での核開発・実験反対団体の旧ソビエトの核実験から現在の北朝鮮の核開発、実験への異なる対応等。
3. 核の過去の使用の是非、将来の使用の可能性をアンケートで問われると、参

加者（学生）に無意識に自国の歴史を正当化する気持ちが表れたようだ。

4. 前回の平和学習旅行には半数がオーナーズプログラムからの参加者だったので、学習意欲、提出物の質の違いが際立った。今回の旅行結果を期待しすぎた私はその落胆から立ち直るのに時間がかかった。現在は立ち直り、今回の反省を2010年の平和学習旅行に反映させようと思っている。

広島平和学習の旅 アンケート2 参加者名_____

1. 広島・長崎に核爆弾を投下してまでも、戦争を終結する状況下であったか。

- (a) 一つの核爆弾投下は必要だったが、二つは必要なかった。(b) 日本の降伏を導くまで必要ある限り使わなければいけなかった。(c) 核爆弾投下は必要なかった。(d) 分からない

ご意見：

2. 核爆弾と通常爆弾との違いは何ですか。

ご意見：

3. 核爆弾は今後戦争で使われる可能性はあるだろうか。

- (a) 可能性はない。(b) 可能性がある。(c) 分からない。

ご意見：

4. 核戦争が起こらないようするには、一般市民は何をすべきか。

ご意見：

5. 核武装が敵対国との戦争を抑止する役割を果たしているか。

- (a) 抑止力がある。(b) 抑止力はない。(b) その抑止力はあるが、緊張が高まれば、先に使いたい気持ちが先行して、使う可能性が高まる。(d) 分からない。

ご意見：

6. 核武装している国が核武装していない国に核武装をやめさせる正当性はあるか。

- (a) 核を持つ国のリーダーとしての正当性はある。(b) 正当性はないが、世界の軍事バランス上、核武装する国をふやさないようにする必要がある。(c) 自らが核武装をやめなければ、正当性も効果もない。(d) 分からない。

ご意見：

7. この広島平和学習の旅に参加する前に、広島、広島長崎の原爆投下の被害状況をどの程度まで知っていましたか。

ご意見：

8. 広島・長崎の核爆弾の威力について、この研修旅行後で何を新たに知り
ましたか。

ご意見：

9. 広島平和学習の旅に参加する目的は何でしたか。研修旅行に参加する前と後
では目的に違いはありましたか。

1) 旅行前：

2) 旅行後：

10. 一般市民を標的にする戦争をどう思いますか。

(a) どのような戦争であっても、人道的に許されることではない (b) 戦争に勝つ
ためには手段を選べない (d) 分からない。

ご意見：